暁 鐘 の 音　NO.30

（かねのね）　秋田大学教職大学院 2024.1.31

職人の「感覚」と「微調整」

教職実践専攻（教職大学院）
准教授　　細川　和仁

自分はアナログ派、デジタル派というほどのこだわりはないつもりなのですが、アナログの世界に関して印象に残っていることをご紹介したいと思います。

一つは万年筆です。３０歳になったときに万年筆を買いたいと思い、いろいろ調べていると、「ペン先を調整する職人」というのがいるということを知り、何のことかよくわからないまま（でも凄そうな感じはするので）、東京・大井町の職人さんの店を訪ねていきました。万年筆のペン先は金属でできているので、人それぞれの書き癖に合わせてペン先を削ったりして調整すると書きやすくなる、とのこと。いろいろな種類の万年筆を試し書きしつつ、ペリカン（ドイツの老舗メーカー）の万年筆に決めようとしたとき、はて、ペン先の調整というのはこれからどうやってやるのだろう、と疑問に思い聞いてみたところ、「試し書きされている様子を見て、だいたい癖はわかりました」というのです。気づかないうちにめちゃくちゃ観察されていたんですね。職人の目というのはすごい！

もう一つは活版印刷です。以前、ある科学教育の研究者の方から名刺をいただいたとき、それが活版印刷で刷られていたのがとても印象に残りました。文字の凹凸が指先に感じられるところが素敵で、いずれ自分もこんなん作ってみたい！と思い、東京・銀座にある活版印刷所を訪ねていきました。活版印刷の現場なんて初めて見たわけですが、活字を並べて版を作る、当たり前のことですが、字と字の間隔をどれくらいにすればバランスが良いか、細かーい調整をしながらレイアウトしていくわけです。いずれ、こういう格好良い名刺を差し出せるような研究者になりたいと思いつつも、結局数年後、中身が追いつかないまま、立派な活版印刷の名刺を刷ってもらったのでした。

そうした職人の仕事というのは、言語化しがたいような、あるいは言語化してもそれをすぐには他者が理解できないような、「感覚」とか「微調整」とか、そういうことがキーワードなんでしょうね。教師の仕事と職人の技を安易に結びつけてはいけませんが、教師の仕事のありようにも通ずるものがあるのではないかと思っています。

（職人さんに調整してもらった万年筆です）

育てるということ

教職実践専攻（教職大学院）
特別教授　　近江谷　正幸

教育学者の北俊夫氏が、以前、ある教育誌に「育てるということ」というタイトルで寄稿文を書いていました。まだ学校にいた頃でしたので、その内容が深く心に残りました。

氏は春にアサガオの種をまき、水をやり、時々肥料を与えたというのですが、「肥料を与えたからといって、成長を早め、すぐに美しい花が咲くわけではない。結果は数カ月も後に出る」とありました。夏に大輪の美しい花が咲いたそうですが、「咲かせたのは花自身。種子や茎、葉に蓄えられた力が自らの花を咲かせたのだ」と述べた上で、次のように続けています。「子供を育てることも同じではないか。子供は本来、生命力や成長力を内に秘めている。これらを引き出し、さらに伸ばすには、周囲の教師や保護者の関わり方が重要になる。結果や成果をせいては事をし損ずる。腰をじっくり据え、時機が来るのを待つ、心のゆとりがほしい」。まさにその通りだなと合点しました。

私たちは児童生徒のためにと思い、先回りしていろいろと準備したり、将来遭遇する阻害要因を取り除こうとしたりしますが、それよりも、子供がいま何を必要としているのかを見定め、時機を逃さず与えることが大切です。そして結果が出るのをじっと待つ、じれったいと思っても必要以上に手を差し伸べず、子供の可能性を信じてじっと待つ、そのような心のゆとりと覚悟が必要なのだと思います。

「自動車や家具やパンなどモノは作るというが、アサガオの花など生き物は作るとはいわない。植物や動物は一般に育てるという」。育てるということは、育つための環境を整え、ある程度必要な手を加えたあとは、自身がもつ力を発揮して結果が出るまで、ひたすら待つことなのだ、と深く得心しました。教師にはその覚悟が必要なのだと思います。

子育てが終わり、学校で児童生徒と関わることもなくなった自分は、もうただじっとひたすら成果を待つことしかできなくなりましたが、これから学校で児童生徒とかかわりをもち、さらに現在子育て中、もしくはいつか親になる若い世代に、このことを伝えておきたいと思います。

春夏秋冬　ご縁を大切に

学校マネジメントコース
現職院生１年次　　川越　真紀子

入学して早１０か月、教職大学院での生活も残すところ数か月となりました。これまでとは全く異なった生活の中で、多岐にわたる講義の内容、勤務校での実践、学校や行政機関の訪問等々、多くのことを学ぶことができました。目にするもの耳にするものすべてが新しく、得難い経験をさせていただいていることに感謝感謝の毎日ですが、もっともありがたいと感じていることは大学院の先生方や院生の皆さんとの出会いです。特に現職教員１０人はほぼ初対面の間柄でしたが、なぜかウマが合ったのか春の初めから和気藹々と過ごすことができています。校種や職務経験、そして趣味や嗜好もまちまちな１０人ですが、時には議論を戦わせながらも励まし合い助け合いの毎日です。院生室での会話では飽き足らず、懇親会を開いては親睦を深めており、たまにはちょっとしたイベントを実施することもあります。秋には市内の一つ森公園でなべっこ遠足を行いました。そつのない準備と役割分担、てきぱき

とした段取りは、さすが学校の先生たちだと思ったものです。これ以上ない秋晴れの下、とめどないおしゃべりと、共に食したきりたんぽ鍋の味は忘れられないものになりました。

夏に開催された「あきた惟蕗の会」では、卒業した先輩方とも交流を深めることができ、教職大学院の絆が着実に結ばれていることを感じました。教職大学院でできたご縁を大切に今後の教員生活を送っていきたいと思っています。

冬真っただ中の今は、修了後の慰労会を楽しみにしながら、実践研究報告書の作成とフォーラムでの発表準備に励んでいる毎日です。

冬になれば思い出す

学校マネジメントコース
現職院生１年次　　佐々木　譲

「猛暑」と言う言葉をよく耳にした今年（※編集担当注釈：本稿は２０２３年当時のものです）の夏。カレンダーとして秋になっても「暑さ」がニュースになりました。最近では「寒い」と感じることの方が多くなり、初霜・初雪と本格的に季節は冬へとバトンタッチされます。

今回、原稿当番となり、何を書こうか迷いましたが、教職に就かなければ経験できなかった「冬の思い出」をテーマにしたいと思います。採用は鹿角市で、冬はクロスカントリーに関わることが自分にとって一番大きな仕事でした。体育の授業や部活のためのコース整備は多い日には１日３回行うこともありました。早朝、たっぷりと雪の降り積もったグラウンドをスノーモービルで圧雪し、コースカッターを引っ張ってコース設定をするのが日課となっていました。今振り返れば「贅沢な仕事」であったように思います。冬のレジャーとして体験料金を払って乗るスノーモービルに毎日ただで乗り放題だったのですから。

しかし、現実はリアルに過酷でした。鹿角の冬はマイナスの気温が基本で、冷える朝はマイナス１０℃を下回る日も珍しくはありませんでした。吹雪で前がほとんど見えない中でスノーモービルを運転することもありました。シーズンの中頃には決まって右手首から肘にかけて腱鞘炎になりました。スノーモービルのアクセルは右手親指で扱うので走行中はずっと引いたり緩めたりという動作をし続けるため「腱鞘炎」が決まったゴールでした。

右手では箸もよく持てないので、給食の時は調理員さんが特別にスプーンを付けてくれました。授業では左手にチョークを持って板書をするため識別困難な文字が黒板に現れますが、子どもは文句一つ言わずに「先生、大丈夫、分かるよ」と受け入れてくれたことに救われました。私は「痛み」の代わりにたくさんの「人の優しさ」をいただいたように思います。「寒い（気候）けど、あったかい（人）」鹿角はそういう所です。

あの当時、鹿角は自分にとって縁もゆかりもない所でしたが、今となっては妻の実家があり、自分にとって第二のふるさとでもあります。毎年、雪で外が白くなると「きっと今シーズンも鹿角の学校では、若い教員が真っ白なグラウンドをスノーモービルに乗って・・・。」と情景が浮かんできます。今年一緒に学んだストマスの中から、もしかしたら、スノーモービルの乗り手が出ることになるかもしれません。免許はいりません。安全運転と子どもの滑りやすさを第一に思うだけで大丈夫です。先にエールを送っておきます。

お世話になった方々へ

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生１年次　　土田　訓徳

学部時代と大学院との大きな違いは、やはり現職の方との関わりがあることでしょうか。そして、学部の頃よりも教授たちとお話する機会も増えている気がします。あ、一番大事なイベントを忘れていました。お食事会です（という名の飲み会）。自分自身これまでこういった席に参加する機会が少なかったため、良い経験になっていますし、それに向けての企画の考案にも参加する機会があり、先輩たちの企画力には圧倒されました。写真はその企画の中でサンタクロースのコスプレをしている自分が、敬愛する廣嶋「大先生」をご指名し、スピーチをお願いしている様子です。師匠は多くのネタの引き出しがあり、弟子である私もたくさん先生から学んでいかなければならないと感じています（教職に関してもモチロンですよ）。

大学院で過ごした期間で様々な出逢いがあり、そのどれもがかけがえのないものでした。未熟な私は何度も壁にぶつかり、そのたびに手を差し伸べてくださる方々がいました。その支えのおかげで今があります。大学院で関わってくださったすべての皆様に感謝申し上げます。今年度で大学院を離れてしまう方も多く、とても寂しいですがみなさんからの愛のある熱いご指導を胸にこれからも精進してまいります。

自然の癒やし

カリキュラム・授業開発コース
学部卒院生２年次　　武石　早穂

今年の冬は比較的暖かく、秋田市に住む私にとっては過ごしやすい日が続いています。秋田地方気象台の発表でも秋田市の１２月の気温は高いから平年並みとなっており、個人的にはしばらく暖冬が続いてほしいと思っているところです。

毎年、お盆と年始に家族で祖母の家に行きます。私は田園風景が好きなので、いつも祖母の家の近所を散歩します。田んぼや川沿いにいるサギの様子を観察したり、水面をはねる魚を見たりすることは夏の一つの楽しみです。冬は夏の間サギがいたところに白鳥がいます。今年は雪解けのなかで白鳥たちの食事の様子が見られました。地球環境パートナーシッププラザ（ＧＥＯＣ）によると、飛来した白鳥たちは稲刈りの後に田んぼに残って

いるお米を食べているのだそうです。冬眠中の虫や卵などが主食なのかと思っていたのですが、私たちと同じようにあきたこまちを食べて越冬していると知って親近感がわきました。秋田県は「コメの国」とも言われますが、意外なところで秋田県の良さを感じることができました。

去年のこの時期は金足の小泉潟公園を散策しました。冷たい風がふく中、元気な鳥たちの声がきこえ、癒やされたのを思い出します。来年度から秋田県内の小学校へ就職しますが、自然と触れ合う時間はもち続けたいと思っています。

結びに

この度は、暁鐘の音３０号をご覧いただきありがとうございます。今回の３０号では、自身の近況やこれまでの経験、さらに季節にまつわるエピソードなど、幅広いテーマで原稿を依頼させていただきました。

さて、現在の教職大学院は、２月に開催される「第１５回あきたの教師力高度化フォーラム」での研究発表に向けて全院生が準備を進めております。これまでの集大成となる現職院生及び学部卒院生２年次は勿論のこと、学部卒院生１年次も来年度の実践研究を見据えて成果や課題を整理しております。本番まであと僅かではありますが、自身の研究を最大限アピールできるよう、少しでもブラッシュアップできればと存じます。

暁鐘の音３０号編集担当　　加藤　毬乃

１月・２月・３月の行事予定

２０２４年

１月　２３日（火）　研究事前発表会

２月　１６日（金）・１７日（土）　第１５回あきたの教師力高度化フォーラム

３月　２２日（金）　令和５年度秋田大学卒業式